

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社

令和8年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺きょうぞうべつとうりょう経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、平成17年には国史跡「骨寺村ほねでらむらしやうえん荘園遺跡」に指定、平成18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年6月に世界文化遺産に登録されました。その関連資産として位置付いている骨寺村荘園遺跡について、当教育委員会では継続して調査研究を行っています。

本年度は、国指定史跡骨寺村荘園遺跡のうち、白山社及び駒形根神社で確認調査を実施し、その成果を本報告書にまとめました。駒形根神社境内地の調査を令和4年度から継続しており、本年度はこれまでの調査成果の確認・整理を中心に行い、その結果、境内地の成り立ちの詳細が明らかになってきました。

本報告書により、調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々に衷心より感謝を申し上げ、本報告書発行のあいさつといたします。

令和8年3月

一関市教育委員会

教育長 時 枝 直 樹



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製）原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製）原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図 原典は中尊寺蔵



境内南東部S X05整地層

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和7年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容確認のため発掘調査を実施したものである。
- 4 令和7年度の調査対象地は、骨寺村荘園遺跡のうち「白山社及び駒形根神社」の駒形8-1地点（駒形根神社境内）である。
- 5 調査主体は一関市教育委員会 教育長 時枝直樹であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおり。

一関市教育委員会事務局文化財課	副参事兼課長	氏 家 克 典
	課長補佐兼文化財係長	西 山 亜希恵
	学芸主任主査	菅 原 孝 明
	文化財調査研究員	千 葉 孝 弥
		菅 原 わかな
	会計年度任用職員	小 岩 誠 也
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は菅原わかなが行った。
- 8 本書図3に使用した地形図は、一関市長の承認を得て測量成果を使用したものである。
(許可番号 令和8年2月27日政第11012号)
- 9 土層断面図の土色表示は『新版標準土色帖 2002年版』（財団法人日本色彩研究所）を使用した。
- 10 測量に使用した経緯度の基準は世界測地系「平面直角座標系X」を使用した。
- 11 挿図中の高さは標高値を示している。
- 12 調査及び報告書作成にあたっては、骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同史跡部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備推進会議の指導と助言を得た。
- 13 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
及川幸子、金子健一、小岩寿男、佐々木源輔、佐藤登美男、佐藤光雄、初村武寛、平山勇、丸山浩治、茂庭文朝、山下峰司
岩手県教育委員会、岩手県立博物館、株式会社一測設計、元興寺文化財研究所、瀬戸市埋蔵文化財センター、文化庁、骨寺村ガイドス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会、有限会社寿工業

目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
(1) 一関市の位置と環境	
(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境	
(3) 歴史的環境	
(4) 骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果	
2 調査に至る経緯	14
(1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み	
(2) 令和7年度調査に至る経緯	
3 白山社及び駒形根神社の調査	23
(1) 調査区の位置と調査の概要	
(2) 調査経過	
(3) 発見した遺構と遺物	
4 総括	39
附章 骨寺村荘園遺跡出土遺物保存処理業務委託報告書	41
写真図版	47

1 位置と環境

(1) 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年(2005)9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年(2011)9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山(須川岳)を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」(昭和43年(1968))や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」(平成17年)および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」(平成18年(2006))、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ渓谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」(昭和2年(1927))がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「猊鼻溪」(大正14年(1925))がある。

(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m~260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班(総括:広田純一(岩手大学教授))による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底(縦方向)と河岸(横方向)への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという(土井2012)。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している(島田2012)。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物(オモダカ・サジオモダカ属)の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている(平塚他2012)。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

(3) 歴史的環境

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺莊園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経^{こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう}を奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年（1318）3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮^{あんどん}は所領の安堵を求め、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈禱料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸^{かぎかけ}、西は山王窟^{さんのうのいわや}、南は磐井川^{みねやまどう}、北は峯山堂（から）馬坂^{まさか}である。**陸奥国骨寺村絵図** 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年（1699）） 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串^{いっくし}村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年（1773）） 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年（1775）） 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺^{はごうほんでら}」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子」、^{わかみこ}「山王社、小名 山王山」、^{ふどうのいわや}「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、^{かんざんふどき}慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

（４）骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。平成21年度調査で逆茂木が残る^{おとしあな}陥穴を、22・23年度で楕円形の^{おとしあな}陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の竪穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの^{はじき}土師器や^{すえき}須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器壺や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。^{とおにし}遠西遺跡からは、12世紀の^{とこ}常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の^{りゅうせんようけいせい}龍泉窯系青磁^し鎚^し蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

そして駒形根神社境内では、令和5年度調査において、12～13世紀と推定される^{てつせい}鉄磬、13～14世紀と推定される灯明皿片、時期は明確でないが経筒の蓋と思われる鉄製品などが出土した。特に、鉄磬は法会において読経の際に導師が叩く仏具であり、法会に関わるものが出土したのは初めてである。これらの出土品により、駒形根神社境内が中世から現代に至るまで宗教的に聖なる場所として認識され、人々に利用されてきたことが裏付けられた。また令和6年度調査により、境内の中心から周辺へ拡張し複数回にわたり整地が行われた状況が明らかとなった。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。平成22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。^{おおぼりそう}大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の^{せとようざん}燈^{とう}明^{みょう}具^ぐなど近世以降の遺物が出土している。また令和5年度の調査では、寛永通宝や石製の宝珠など同じく近世の遺物が出土した。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は、近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『^{ほうないふどき}封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」

やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

令和5年度には山王窟を調査した。窟入口から西側の急斜面を手掘りした結果、かわらけ片、寛永通宝、鰐口片などが出土した。これらの遺物は近世から近代にかけてのもので、この時代には奉納の場所として利用されていたようである。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

（一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1.位置と環境」を引用、加筆）
（菅原孝明）

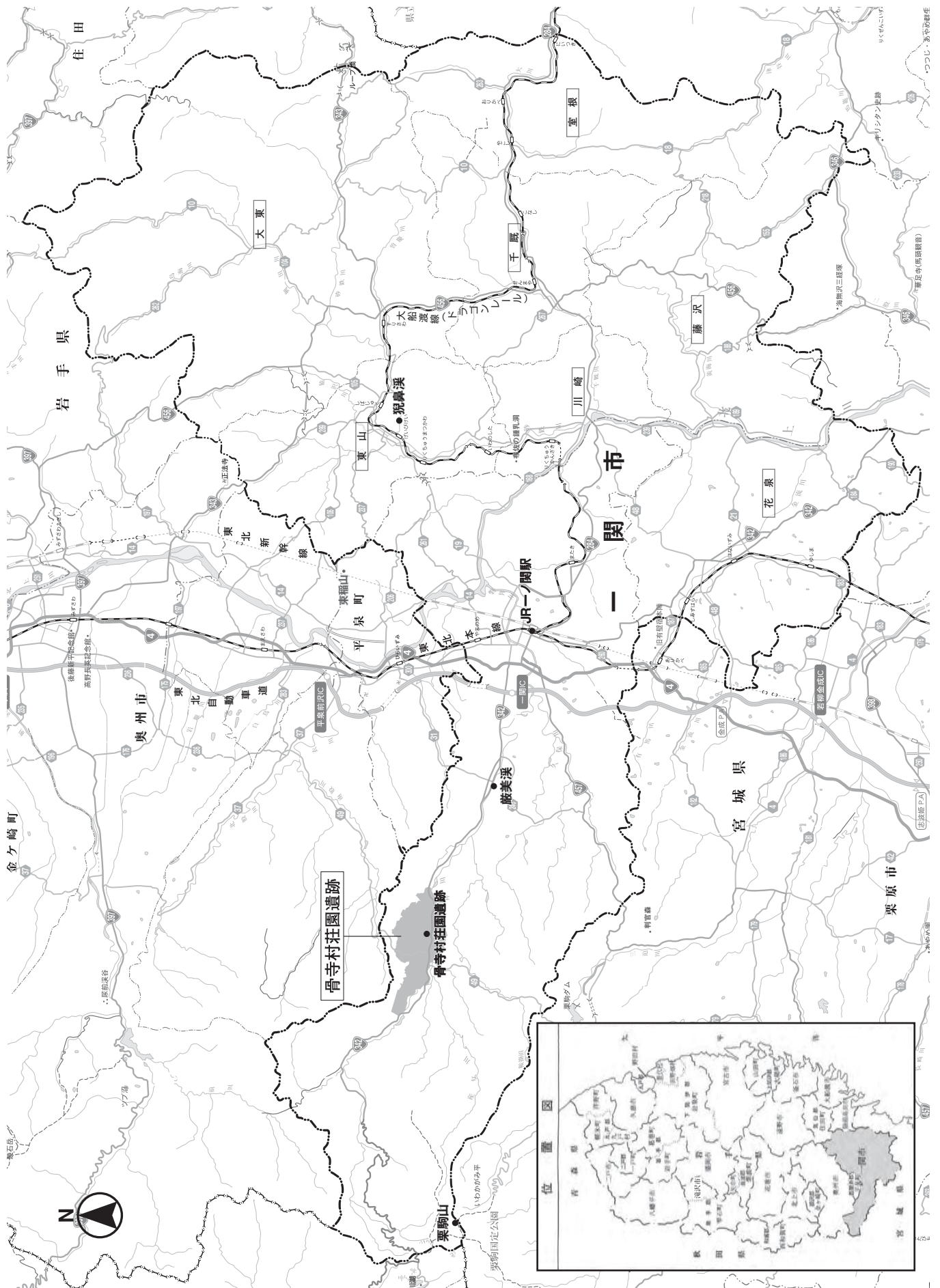


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

2 調査に至る経緯

(1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村 荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を 活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、 集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、 要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要文化的景観に選 定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産 条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」と した世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震(マグニチュード7.2)発生。震源地は本寺地区の西方 約3km

平成20年 7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年 4月 4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年 1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年 9月 8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年 3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年 5月	イコモス「登録」を勧告
平成23年 6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田 a 火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年 5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年 1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年 1月 7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自然

	科学分析を実施、13世紀後半と推定
	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け
	梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認
	平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認
	白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認
	平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け
	山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝2条、 竪穴状遺構確認
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年3月7日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フ ラスコ状土坑確認
	駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年3月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査、遺構は発見されず、自然科学分析を実施し縄文時代 と推定
令和2年度	駒形4-1地点確認調査 土坑確認
令和3年3月12日	第16回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

令和3年度	駒形1-1地点確認調査
令和3年9月19日	骨寺村荘園遺跡研究集会 開催
令和4年1月6日	第17回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和4年3月18日	第18回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和4年度	平泉野遺跡（若井原194-1）確認調査、竪穴住居、竪穴遺構確認 白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、8世紀の土師器確認
令和4年8月18日	第19回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和5年度	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、鉄磬、13世紀の灯明皿出土 慈恵塚確認調査 山王窟確認調査
令和5年8月30日	「平泉の文化遺産」拡張登録に係る関係者会議において、柳之御所のための推薦書素案作成、関連資産を含んだ10資産を「ひらいずみ遺産」と位置づけ、一体的な保存管理・調査研究・活用及び発信に取り組むことを確認
令和6年3月3日	第20回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和6年度	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査
令和7年度	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査
令和7年7月28日	第21回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和7年10月7日	第22回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

(2) 令和7年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。一方、宗教施設の調査については、令和5年度調査により駒形根神社境内から鉄磬が出土したことで、現在の宗教施設が中世に遡る可能性を見出せた。今後の調査研究の進展が期待される。

市教育委員会は、平成15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。拡張登録を目指す関係県市町間で25～29年度、さらに平成30～令和4年度まで延長して調査を実施したが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らなかった。令和5年の県市町関係者会議により、柳之御所遺跡のための推薦書素案作成、関連資産を含む10資産を「ひらいずみ遺産」と位置付け、一体的な保存管理・調査研究・活用及び発信に取り組むこととなった。

令和7年度は、平成21年度から実施している発掘調査計画を改定した第3期計画（令和4～令和8年度）の4年目にあたる。駒形根神社境内のうち、拝殿・神楽殿間の平場とその北側にある土壇周辺を調査した。これまで（平成11～令和7年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（一関市教育委員会2025『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「2 調査に至る経緯」を引用、加筆）
（菅原孝明）

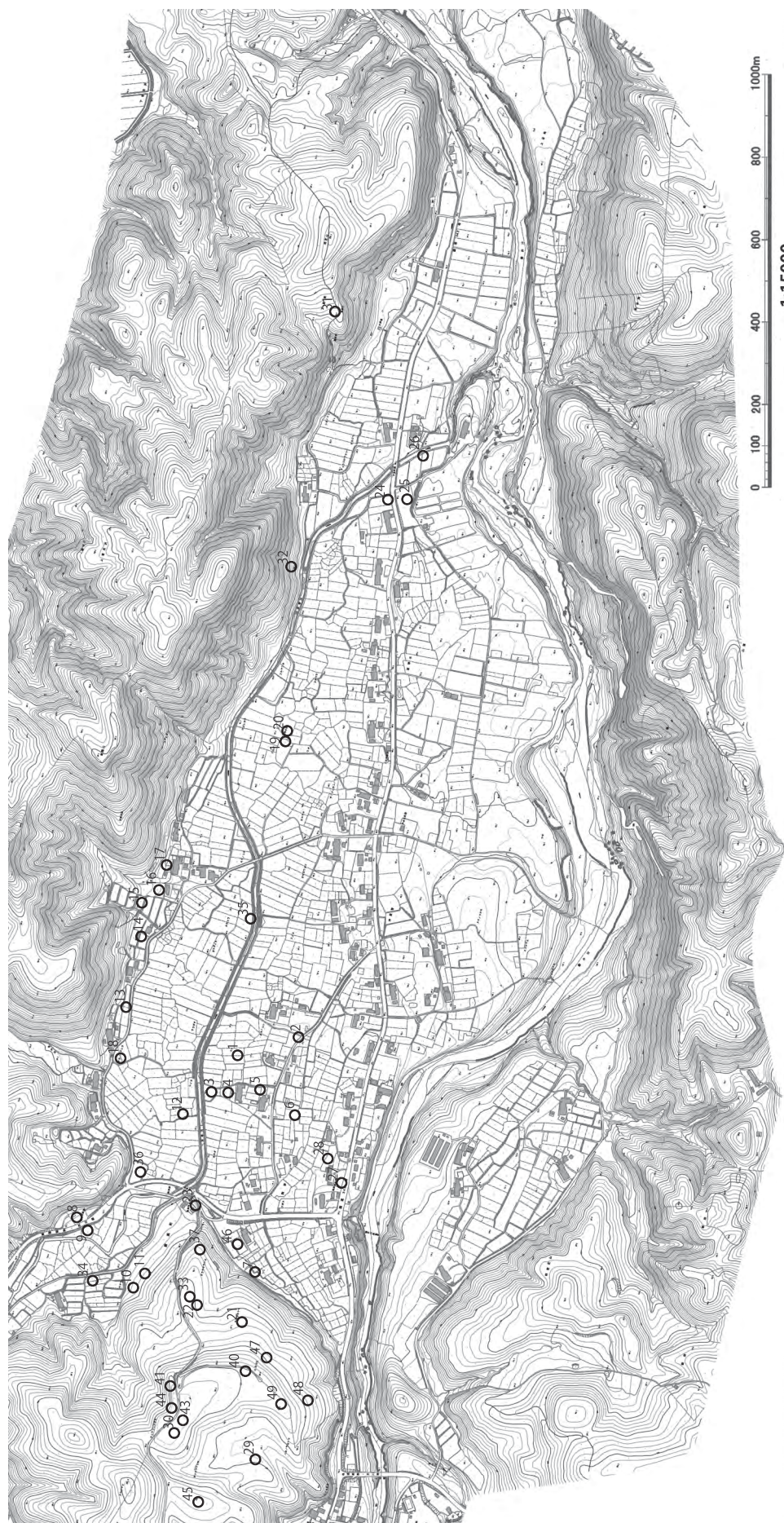


図2-1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(1)

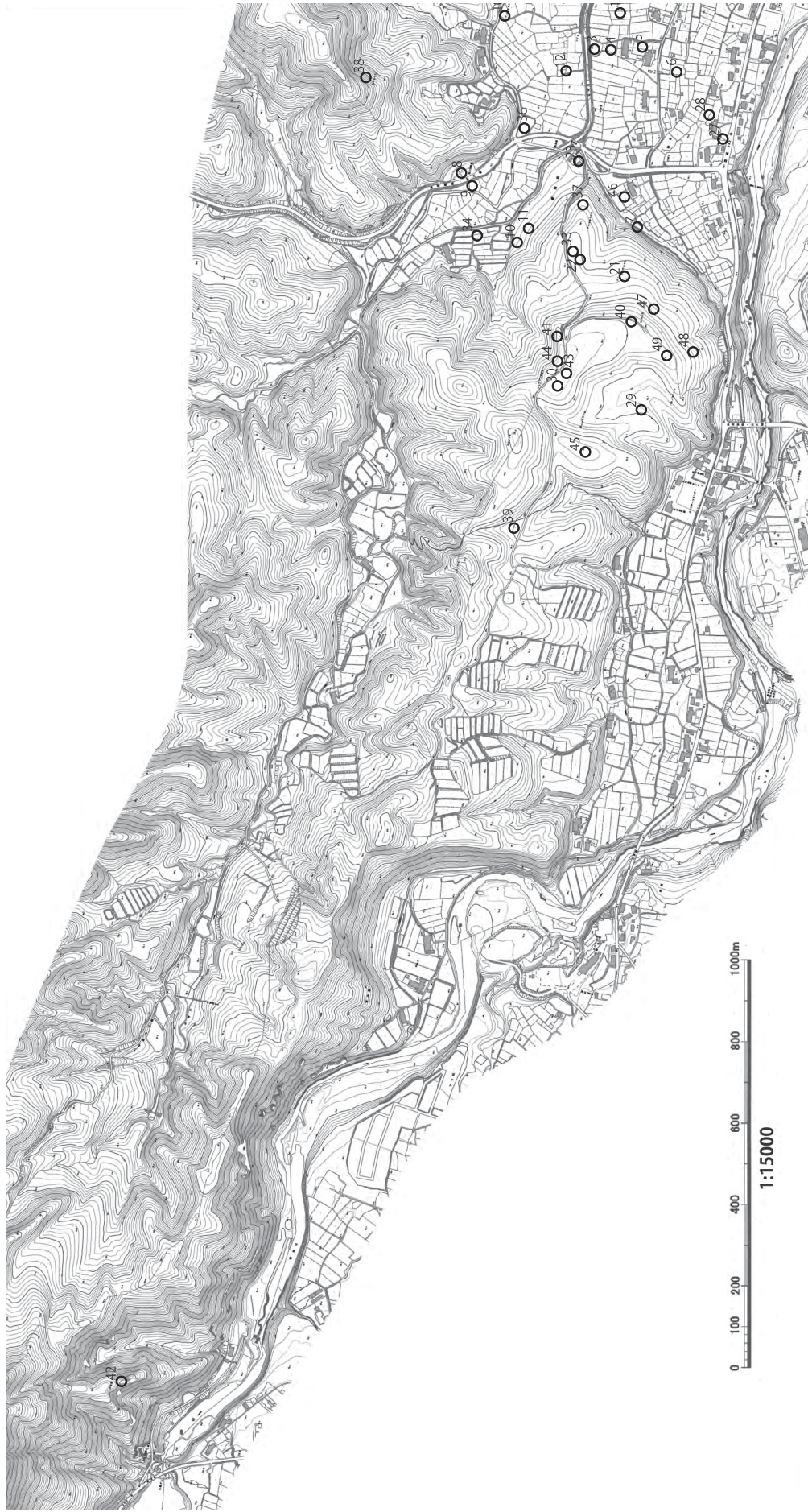


図2-2 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(2)

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、土師器片、かわらけ（灯明皿）、陶磁器片、鉄磬、鉄釘、近代銭	平成18・令和4～7年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、25-7、慈恵塚	周溝、陶器片、石製品、鉄滓、銭貨	平成22・令和5年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物、土器、石器、鉄製品、銭貨	平成28・令和5年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度
47	駒形4-1	土坑、縄文土器片、礫石器、石製品	令和2年度
48	駒形1-1	炭窯跡、土坑、柱穴状ピット、溝、縄文土器片、石器	令和3年度
49	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴住居、竪穴遺構、土坑、落とし穴、埋設土器、柱穴状ピット、縄文土器片、石匙、削器、匏型石器、磨製石斧、磨石、凹石、台石、剥片、黒曜石	令和4年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表



図3 駒形根神社調査区位置図

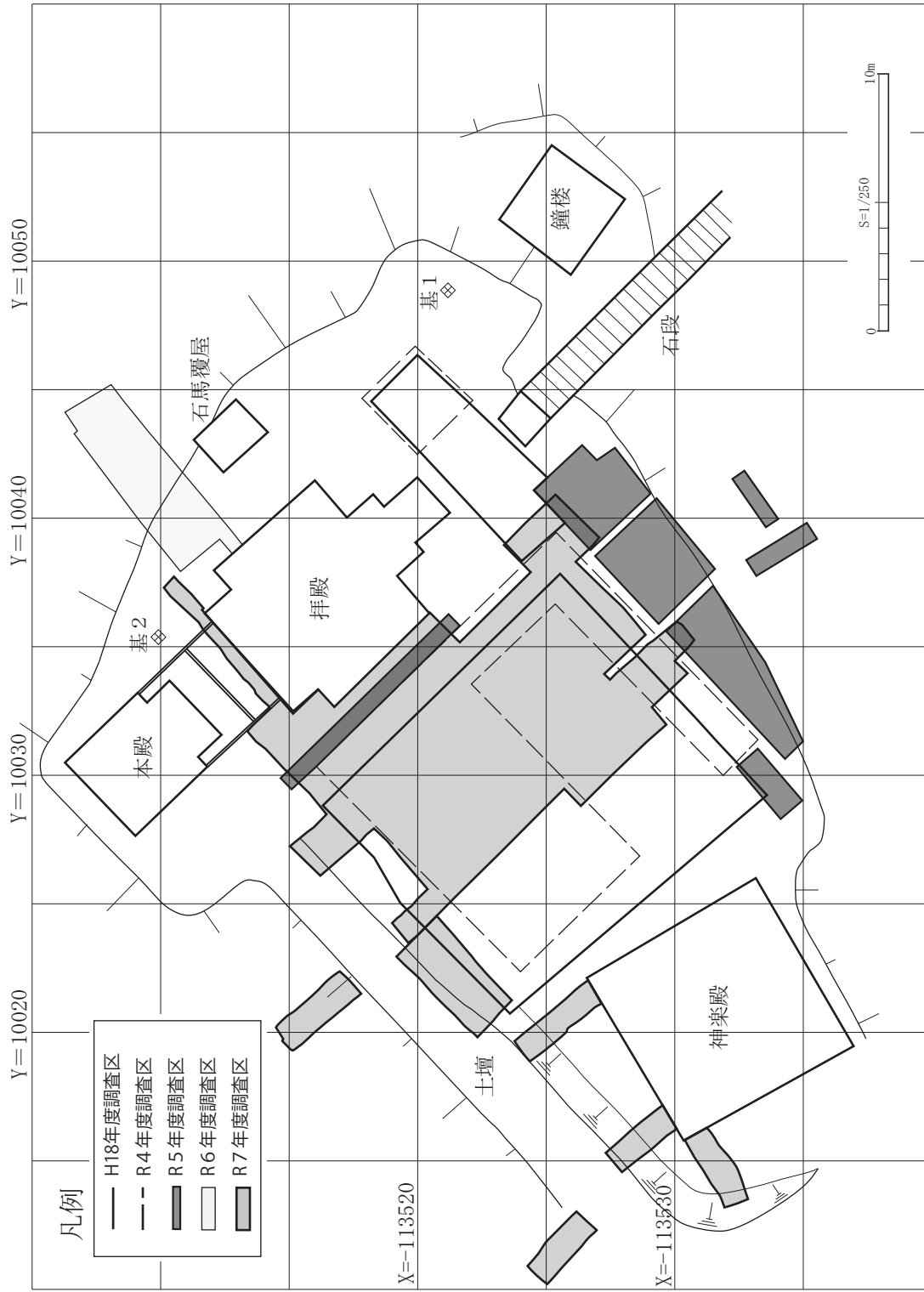
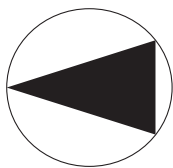


図4 年度別調査区

3 白山社および駒形根神社の調査

(1) 調査区の位置と調査の概要

今回の調査地は、平泉野台地と呼ばれる丘陵地北側斜面の縁辺部にあたり、その低位段丘の東端部（一関市巖美町字駒形8-1）に所在する駒形根神社境内である（図3）。調査地点は拝殿・神楽殿間の平坦面（A区）と、神楽殿・土壇周辺（B区）の2地区である。A区は平成18年度、令和4・5年度に確認調査を実施しているが、遺構面の状況が明確ではなかったことから、令和6年度に拝殿の南西部に2か所のトレンチを設定したところ、整地層と見られる土層の存在を確認した。平面的な調査によってそれらの広がり进行を明らかにできる

見通しが得られたことから、今年度の調査は拝殿の北部及び北西部をのぞく既調査区とほぼ重複する範囲を調査区として設定した（図4）。調査を行うにあたって、整地層等の平面図作成や、既調査時に掘り残した土層断面観察用畦を利用した土層堆積状況の確認作業、地山面における遺構検出作業を中心に行い、攪乱層等を除いて新たに掘削した部分は小範囲にとどめた。B区はこれまで調査が及んでいなかった神楽殿周辺の情報を得ること、及びA区で南側の一部を調査した土壇状遺構の構造に関わるより多くの情報を得ることを目的として6か所のトレンチを設定した。

調査期間は令和7年4月21日から9月30日であり、調査面積は142㎡である。A区の調査成果がまとまった7月17日には令和7年度骨寺村荘園遺跡指導委員会第1回史跡部会を開催し、B区を含めた調査成果については、10月9日に第1回骨寺村荘園遺跡指導委員会を開催して委員各位よりご指導頂いた。また、9月6日には現地説明会を開催し、調査区的一般公開を行った。調査終了後は埋め戻し作業を行い、現状に復旧した。

遺構実測図の作成に当たっては、拝殿の北東部に設置した国土座標の基準点（基1・基2）を使用した。A区では調査区内に2m方眼の鋏を設置し、間竿を使用して縮尺1/20の平面図を手計りで作成した。B区は分散したトレンチ調査であり、高低差があるため、トレンチごとに任意の基準点を設定して個別に縮尺1/20の平面図を作成し、その基準点に国土座標上の位置を与えることでA区の平面図と合成した。測量基準点の成果は以下のとおりである。

基1 X = -113521.189、Y = 10048.865、H = 183.630

基2 X = -113509.913、Y = 10035.376、H = 183.989

写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを使用し、簡易な記録撮影にはコンパクトデジタルカメラ等も使用した。

(2) 調査経過

- 4. 11 拝殿と神楽殿の間に北西-南東7.0m、北東-南西13.5mのA区を設定（図7）。
- 4. 21 令和7年度発掘調査開始式（於、交流館）。表土除去作業開始。
- 4. 22 表土が薄いため、表土除去作業がほぼ終了。

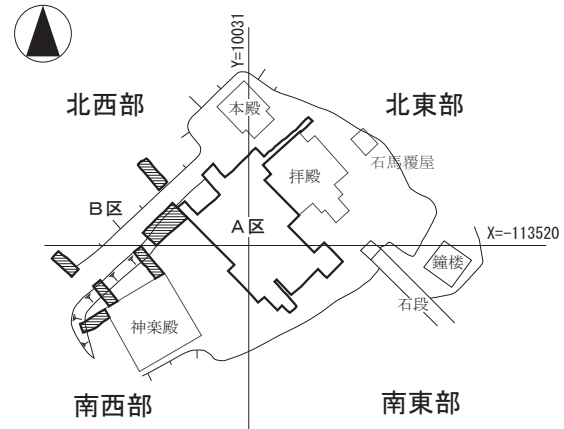


図5 調査区の位置

4. 24 遺構検出作業開始。北西隅の地山は風化した花崗岩層、その東側・南側は礫を含む固い凝灰岩層となっている。南東部に黒色土（S X05）、南西部付近にはそれより新しい褐色土層（S X07）が分布。

5. 9 礫を含む凝灰岩層については整地層の可能性を考え、各層の分布の把握に努めるとともに、それらの上面で遺構検出作業を行う。

5. 13 調査区北西辺からその北側の土壇（S X08）にかけて1 T・2 Tを設定し、土壇の精査開始。礫を含む凝灰岩層の上面で、マンガンが多く含み東西方向に延びる溝状の輪郭が見えてくる。

5. 14 1 T・2 Tで土壇断ち割り。北東辺から拝殿にかけて3 T・4 T設定。

5. 15 4 Tでは拝殿のコンクリート基礎と平行する布掘りがあり、その下層から旧表土と見られる暗灰色粘土層が拝殿床下側に広がっている状況を確認。調査区南東隅に5 Tを設定。測量業者に委託し、遺構平面図作成のための基準点を設定。

5. 19 表土等の除去作業が終了。遺構面の状況がおおよそ明らかになったので調査区の全景写真を撮影。

5. 20 平面図作成開始。

5. 21 5 Tやその南側に隣接する令和5年度調査区（R5-4）では、黄褐色土や黒褐色土の整地層（S X05）が丘陵南東部斜面に施行されている状況が明確になる。4 Tを南北方向に拡張。

6. 2 礫を含む凝灰岩層の実態を把握するため、調査区南西壁際に約5mのトレンチを設定し、掘り下げる。

6. 4 1 Tで、土壇が構築される旧表土（II層）を断ち割る。

6. 5 礫を含む凝灰岩層の平面図作成、写真撮影。

6. 10 3 T-4 T間を拝殿基壇際まで拡張。整地層の範囲が明確になる。

6. 30 拝殿背面の雨落ち溝を長さ約7m、幅約60cmのトレンチとし、本殿造営に係る整地層（S X06）などを検出。調査区南西壁際のトレンチを南側に約3m延伸。

7. 1 1 T・2 Tの土層堆積状況精査。調査区北東部周辺の平面図作成。

7. 2 一関市立花泉中学校2年生「社会体験学習」で発掘体験（3名参加）。

7. 8 拝殿北西部周辺の平面図作成。



SX06検出状況

画面右は拝殿で、コンクリート基礎が掘り込まれている。左奥は本殿。



拝殿の西側における地山の状況



境内南東部で現れた丘陵の傾斜と整地層（左上は拝殿）

7. 9 礫を含む凝灰岩層を精査の結果、自然の地山と判断。本日をもってA区の調査は一応終了。

7. 17 令和7年度史跡部会開催。

7. 28 SX09柱穴状遺構半截。断面図作成。

7. 29 神楽殿周辺を対象とした追加調査（B区）のため、SX08土壇の南西側にB1～B3Tを設定。

7. 30 B1～B3T表土除去。いずれも地山を削り出して土壇を造成しているが、B1T・B2T頂部付近における地山上の堆積層が盛土かどうかの判断が難しい。A区平面図のレベル測定（～7. 31）。

7. 31 SX08北西側にB4・B5T、南西側にB6Tを設定し、表土除去（～8. 4）。

8. 4 B5Tの表土下に旧表土と見られる厚い黒褐色土層（Ⅱ層）があり、その上にSX08の盛土と見られる褐色土層を確認。B6Tの西半部ではⅡ層が堆積する地山、東半部では盛土と見られる褐色土層が現れ、SX08の構築方法に違いが見られる。

8. 5 B区の平面図作成開始。

8. 19 測量業者に委託し、B区の基準点測量を実施。

8. 20 B5Tの地山上でⅡ層に覆われる土坑（SK13）を発見。

9. 1 SX08の情報を得るため、南端部の一部を断ち割る。B区全景写真撮影。

9. 6の現地説明会開催に向け清掃開始。

9. 3 B6Tの中央に広がる灰白色土はSX08の盛土ではなく、それより新しい土坑（SK14）と判明。

9. 6 現地説明会開催（32名参加）。

9. 9 B2T・6Tで供養塔の設置面を精査。

9. 16 調査終了地区から埋め戻し開始（～9. 24）。

9. 25 器材整理（～9. 29）。令和7年度の現地調査終了。

（千葉）



現地説明会の様子（9月6日開催）

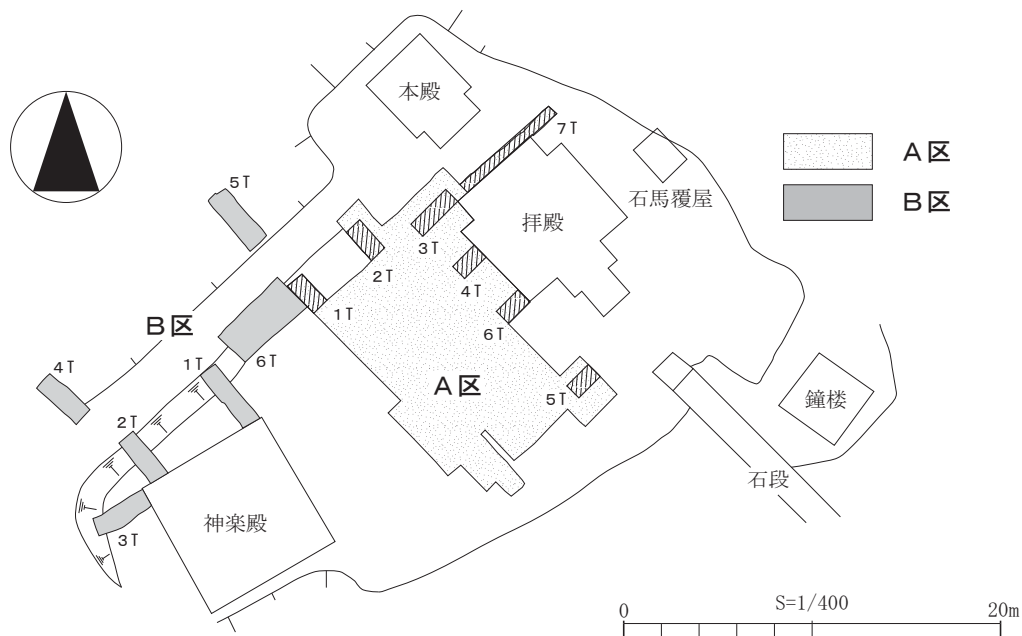


図7 調査区A・Bと小トレンチ位置図

Y=10020.00

Y=10030.00

Y=10040.00

X=-113510.00

X=-113520.00

X=-113530.00

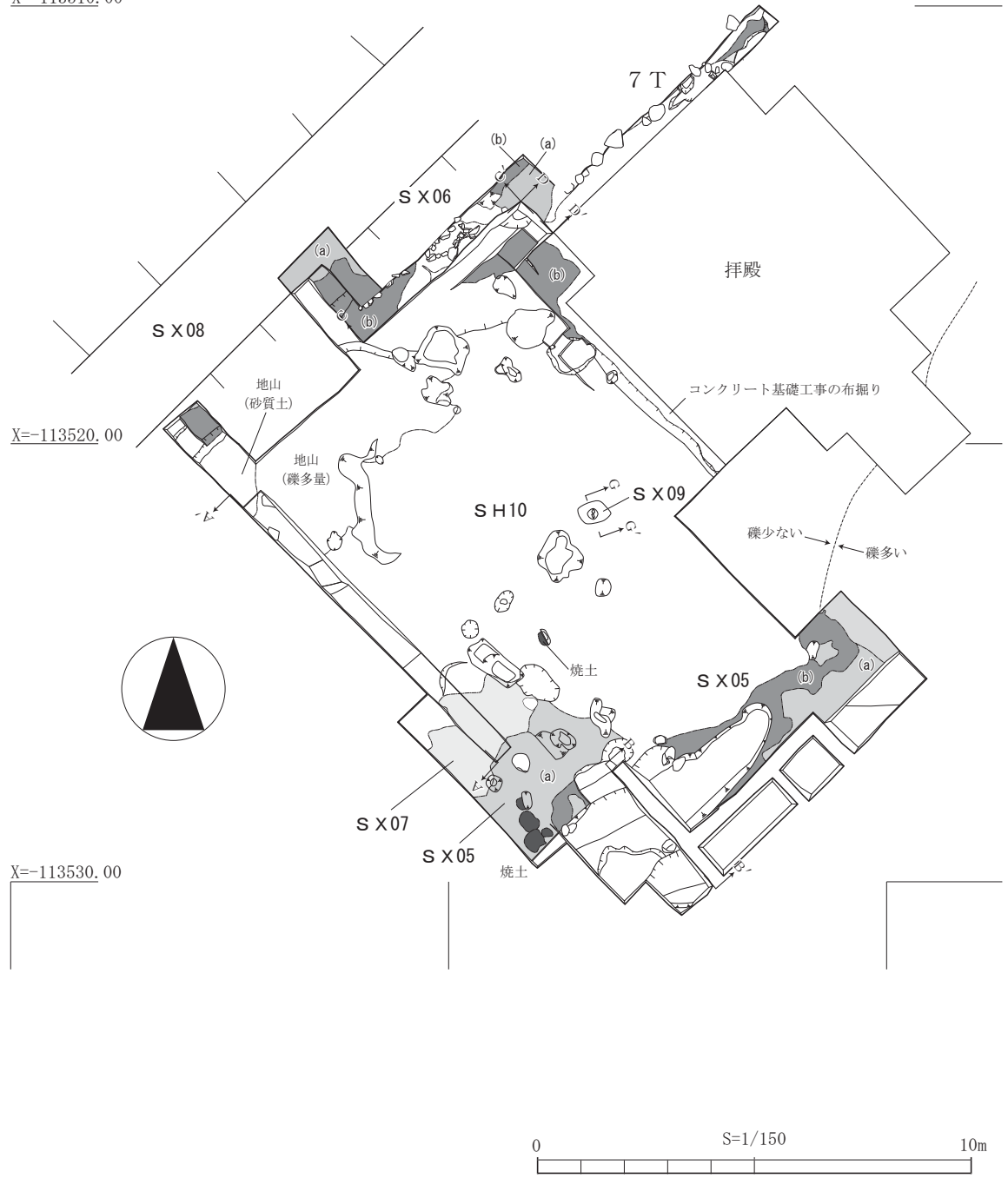


図8 A区平面図

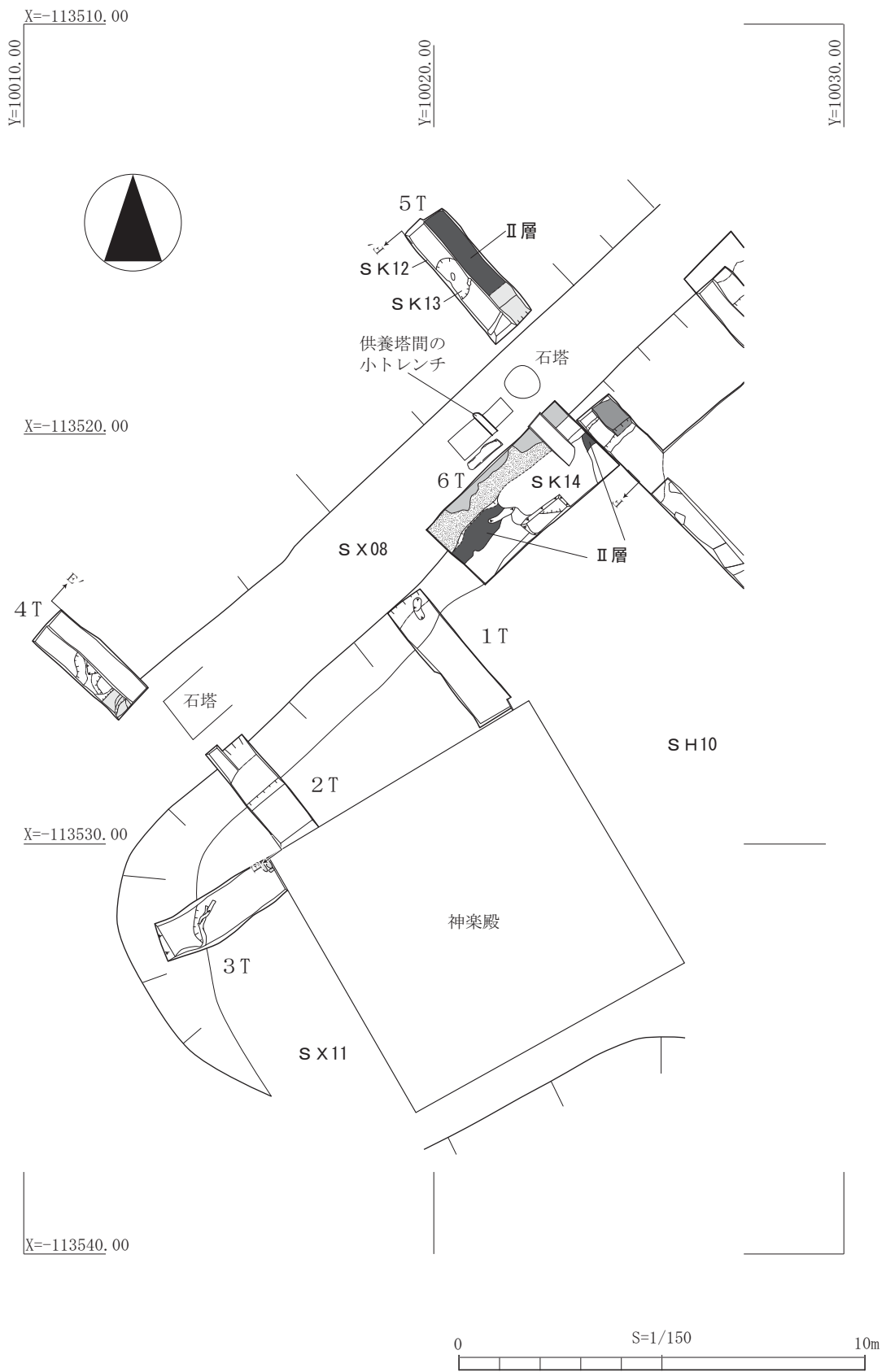


図9 B区平面図

(3) 発見した遺構と遺物

①基本土層

今回の調査区の中では、S X08土壇の下層に堆積層が保存されている。A区2T-B区5T間の土層断面により層序を説明する(図10)。

I層 S X08土壇の南側では、過去に確認調査を行った際の埋め戻し土、S X08の北側ではS X08とII層上に堆積したしまりのない黒褐色土が表土である。

II層 層厚25~40cm黒褐色土で旧表土と考えられる。B区6TからA区の北東部にかけて30~40cmの厚さで堆積しており、S X08の南側(X=-113520ラインの南側)はS H10によって掘削されているため、分布状況は不明である。

III層 S X08の下から北側にかけて堆積する褐色土であり、層厚は10~20cmである。II層に直接覆われており、上面に黒褐色土が浸透している。

IV層 S X08周辺から北側では風化した花崗岩層、南側では凝灰岩層を主体とする地山である。大小の礫を多く含む凝灰岩層の一部は拝殿の東側、石馬覆屋の南側に露出している。S X08の南側はおおよそ平坦であるが、S X08の北側は北西方向へ緩やかに傾斜しており、S X08の南側の裾部とB 5 Tの北端部で見ると、比高は0.9mである(註1)。

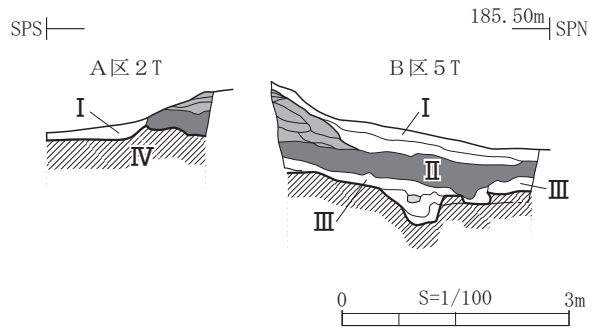


図10 基本土層

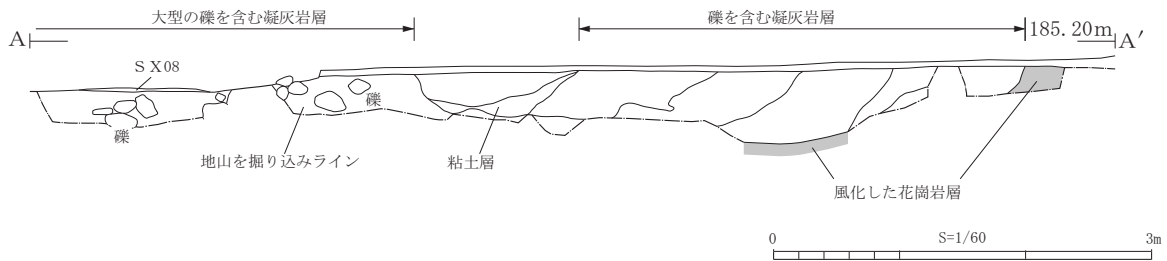


図11 地山断面図

②発見した遺構と遺物

S X05整地層(図12)

調査区南東部に施工された整地層である。令和4・5年度調査区の再調査の結果、駒形根神社境内の南東部を埋め立てた厚い盛土と、その上面を覆う黄褐色土主体の整地層を一体の整地層と考えたものである(図6・8では黄褐色土主体の整地層をS X05(a)、厚い盛土をS X05(b)と表示)。盛土部分は南東方向に傾斜する地山上に黒褐色土や黒色土を直接盛土したもので、厚さは最大で1.25mである。

S X05は16層に細分することができ、S X05(a)とした3a・3b層と、S X05(b)とした4b~13層では土色及び土性が大きく異なる。S X05(b)はほとんど南側に傾斜しており、5a層のみお

註1 この地山は、風化した花崗岩層とその上に堆積した凝灰岩層が北側から南側に傾斜して堆積しており、前者は、調査区南西隅の地表下約1.3mで、大型の礫を多く含む凝灰岩層下で確認している。また、X=-113525ライン付近では、凝灰岩層の中上位に厚さ20cm以上の白色粘土層が形成されているなど、平泉野台地の成り立ちに関わる知見が得られた。

註2 黒褐色の盛土層には大小の礫が多く含まれており、令和4年の調査区では長径40cm、短径30cm前後の比較的大型の礫が下層から多数出土している。にぶい黄褐色土の整地層は、今回の調査では土層観察用畔でわずかに観察できるのみであったが、令和4年の調査では平面的な広がりを確認しており、層厚は5~7cmまたは6~12cmと報告している(一関市教育委員会2023)。

およそ水平な堆積となっているが、土色及び土性に際立った違いは見られない。S X05 (a) はその上面を直接覆う整地層で、礫の小ブロックを多く含む黄褐色土や比較的均質なおい黄褐色土である(註2)。確認できた層厚は6 cmである。検出した時点ですでに失われ、S X05 (b) が露出していた箇所が多い。

このような位置関係及び堆積状況から、S X05は丘陵斜面を埋め立てて境内南東部を拡張したもので、S X05 (b) は基礎整地、S X05 (a) は上面を水平な平坦面とし、地山土を敷き詰めた仕上げの舗装と考えられる。

遺物は、令和5年度の調査で掘り残した土層観察用畔を除去した際、11層(黒色土層)から寛永通宝が1点出土した(図16-1)。11層は令和5年度の調査で中世のかわらけが出土した土層である。

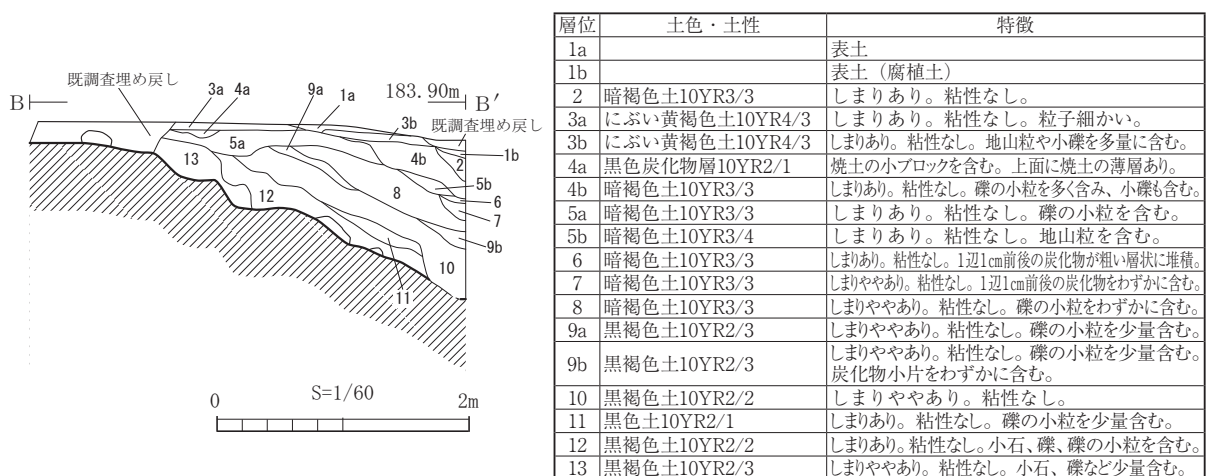


図12 S X05土層断面図

S X06整地層(図13)

調査区北西側、本殿の南側から土壇にかけて検出した整地層である。令和5年調査時の埋土や攪乱層をすべて除去した上で、新たに2T・3Tを設定し検出作業を行った。本整地層は、本殿からS X08土壇にかけて分布するもので、境内北西部を埋め立てた黒色土主体の厚い盛土(4層)と、その上面を覆う黄褐色土主体の整地層(3層)を一体の整地層と考えたものである(図6・8では、3層をS X06 (a)、4層をS X06 (b)と表示)。表土が薄く、黄褐色土の整地層はすでに露出している状態であった。検出した範囲は南北約4.3m東西約3mで、黒色土の深さは最も深い北側で約75cm、浅いところでは北東側で約20cmと、北側にかけて厚く堆積している。その上面に黄褐色土主体の整地層(4層)が約2cmの厚さでほぼ均一に堆積している。

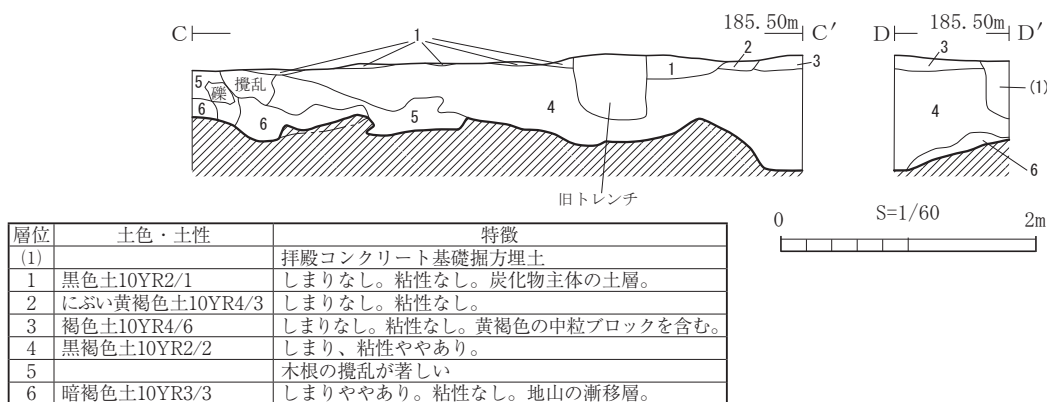
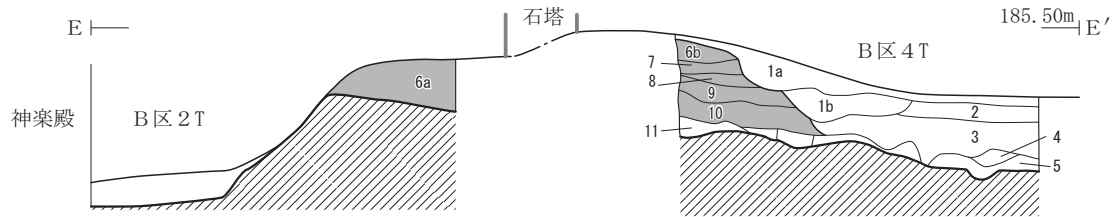


図13 S X06土層断面図

S X07整地層

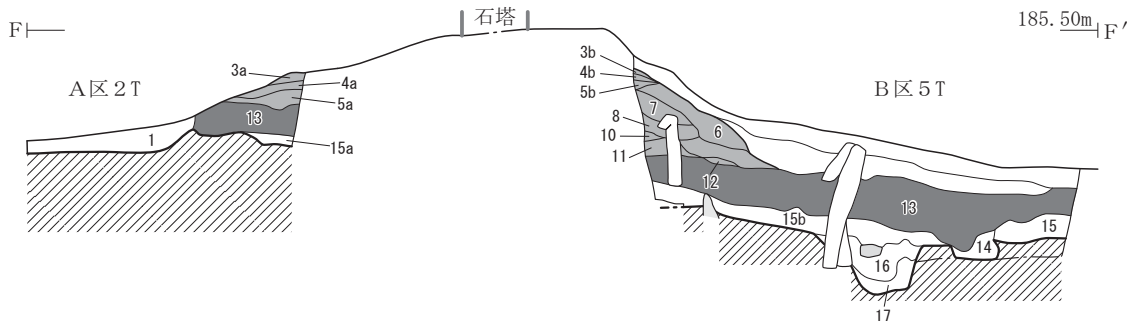
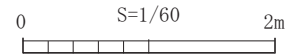
調査区南西隅付近で発見した整地層である。S X05とわずかに重複しており、それより新しい。地山上に直接整地したもので、地表面下3～5cmの高さで発見した。今回検出した範囲は東西約2.5m、南北約3.5mであり、さらに西側の神楽殿側へと延びている。厚さは約6cmである。(註3)。整地土は6層に細分したが、地山粒を含むしまりのある褐色や暗褐色の砂質土を主体となっている。なお、本整地層の上面で直径40cm前後の焼土面を7箇所検出したが、近年の神社の行事に関わるものと考えられる。

遺物は出土していない。



層位	土色・土性	特徴
1		しまりなし。粘性なし。上層は腐植土層。
2	暗褐色土10YR3/4	しまりややあり。粘性なし。
3	黒褐色土10YR3/2	しまりなし。粘性なし。
4	黒褐色土10YR3/2	しまりなし。粘性なし。
5	黒褐色土10YR3/1	しまりなし。粘性なし。
6a	にぶい黄褐色土10YR4/3	しまりややあり。粘性なし。
6b	にぶい黄褐色土10YR4/3	しまりややあり。粘性なし。黄褐色土ブロックを多く含む。

層位	土色・土性	特徴
7	にぶい黄褐色土10YR4/3	しまりあり。粘性なし。
8	灰黄褐色土10YR4/2	しまりあり。粘性なし。
9	暗褐色土10YR3/3	ややしまりなし。粘性なし。
10	黒褐色土10YR2/2	しまりややあり。粘性なし。
11	暗褐色土10YR3/4	しまりなし。粘性なし。



層位	土色・土性	特徴
1	黒褐色土10YR2/2	しまりなし。粘性なし。腐植土主体の層。木根多い。
2	黒褐色土10YR2/2	しまりなし。粘性なし。均質。
3a	暗褐色土10YR3/4	ややしまりなし。粘性なし。地山粒をわずかに含む。
3b	黒褐色土10YR2/3	ややしまりあり。粘性なし。地山ブロックや地山粒を多く含む。
4a	黒褐色土10YR3/2	しまりなし。地山粒を少量含む。
4b	黒褐色土10YR2/3	しまりあり。粘性なし。地山粒を少量含む。
5a	黒褐色土10YR2/2	しまりあり。地山粒や小礫を含む。土色・土性はII層に近似。
5b	黒褐色土10YR2/3	しまりあり(4b層よりやや軟質)。
6	黒褐色土10YR2/2	しまりあり。粘性なし。
7	黒褐色土10YR2/2	しまりあり。粘性なし。

層位	土色・土性	特徴
8	暗褐色土10YR3/3	しまりあり。粘性なし。
9	暗褐色土10YR3/3	しまりなし。粘性なし。
10	暗褐色土10YR3/4	しまりなし。粘性なし。
11	暗褐色土10YR3/4	しまりなし。粘性なし。
12	暗褐色土10YR3/4	しまりなし。粘性なし。
13	黒褐色土10YR2/2	しまりあり。粘性なし。均質。
14	黒褐色土10YR2/2	しまりあり。粘性なし。
15a	暗褐色土10YR3/4	しまりあり。粘性なし。上面にII層の侵食あり。地山の漸移層。
15b	褐色土10YR4/4	しまりあり。粘性なし。上面にII層の侵食あり。地山の漸移層。
16	にぶい黄褐色土層10YR4/3	しまりあり。粘性なし。地山ブロックを多く含む。
17	暗褐色砂質土10YR3/3	しまりあり。砂を多く含む。

図14 S X08土層断面図

註3 S X07中に長軸約40cmの円礫が露出しており、検出面から2～4cm付近を境に上方が褪色している。褪色していない下方の状況から、S X07は本来現状より厚く、10cm前後の厚さがあった可能性がある。

S X08土壇 (図14)

境内北西部にある土壇である。S X11平場の北西隅からA区2 Tにかけて約20m伸びており、神楽殿側の一部で地山が露出した状態となっている。5か所のトレンチを設定し、B区6 Tのほぼ中央から南西部は地山を削り出し、北東部は盛土によって造成されていることを確認した。規模は、A区2 T - B区5 T間でみると、上幅約2.5m、下幅約4.2mであり、高さは約0.7mである。上面の中央に供養塔や石祠が一列に並んでおり、その両端でみると方向は北で約47度東に偏している。石塔と石祠は石製の台座上に据えられており、その設置面は盛土の最上層(図14-3a・3b層)である。北東部についてみると、II層の上面に褐灰色や暗褐色土を直接盛土して造成しており、最上層はS X06整地層と同一の土層である。

遺物は出土していない。

S X09柱穴状遺構 (図15)

拝殿の西側、調査区中央東側の地山上で発見した柱穴状遺構である。掘り方の平面形は楕円形で、断面形は南側が概ね垂直に、北側はやや開き気味に立ち上がっており、底面は平坦である。規模は長径72cm、短径47cmである。掘り方埋土は拳大の礫を含むしまりのあ

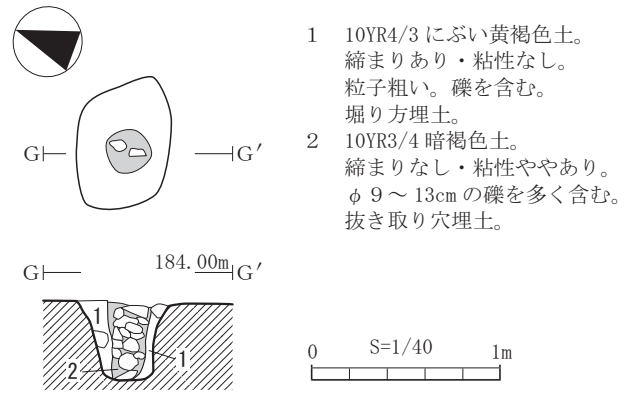


図15 S X09断面図

るにぶい黄褐色土である。その中央部で直径23cmの円形の抜き取り穴を確認した。その中には拳大の礫が底面から検出面まで詰まっており、その隙間には黒褐色の砂質土が自然堆積しているが、主体は人為的に埋められた礫であることから、柱痕跡ではなく抜き取り穴と考えた。

遺物は抜き取り穴から白磁の小盃の口縁部が1点出土した。近代以降のものと考えられる(註4)。

S H10広場 (図8)

拝殿 - 神楽殿間の平坦面を広場とする。おおよその範囲を示すと、北東辺は拝殿、南西辺は神楽殿、北西辺は土壇の南側裾部、南東辺はS X05の南端部である。規模は北西 - 南東間が約15mであり、南西 - 北東間も約15mと推定できる。過去の調査時の埋め戻し土を除去すると、南端部を除くすべての地点で地山が現れ、地山中の礫が目立つ箇所もあるが、おおよそ平坦な地盤となっている。南西 - 北東間での比高は0mであるが、北西 - 南東間では0.4mとなっており、緩やかに南側に傾斜している。北西辺は北西方向から伸びる丘陵裾部(地山)やII層、S K14を掘削して造成されており、南東部はS X05整地層によって拡張されている。S H10上面でS X09柱穴状遺構を検出しているが、新旧関係は不明である。

S X11平場 (図9)

S X11平場は、神楽殿周辺の北東 - 南西約14m、北西 - 南東約11mの範囲にある平坦面である。S X11平場の東側はS H10広場に面し、北西側から南西にかけては、丘陵斜面の切り落としによって造成されている。南東側は丘陵の斜面となっている。1～3 TをS X08から神楽殿にかけて設定したが、いずれも表土下は地山となっている。

S K12土坑

B区5 Tで発見した土坑である。III層に覆われ、IV層上面で検出した。平面形は楕円形で、規模は

註4 小盃の口縁部破片資料であるが、断面の形状、色調、胎土が本遺跡で表土から多く出土している近代以降の小盃と類似していることから同様のものと考えた。

長軸が約1.1m、短軸が0.8m以上、深さは46cmである。壁面は北側が急な傾斜となっているが、南側は底面から緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分することができ、1層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色土、2層は暗褐色の砂質土で、凹凸のある堆積状況が見られることから人為的に埋め戻したと考えられる。

遺物は出土していない。

SK13土坑

B区5Tで発見した土坑である。調査区の西壁面で確認したもので、II層に覆われ、III層上面から掘り込まれている。規模は、確認できた幅が0.4m、深さは24cmである。壁面は急な傾斜となっており、底面は平坦である。埋土はしまりのある黒褐色土である。

遺物は出土していない。

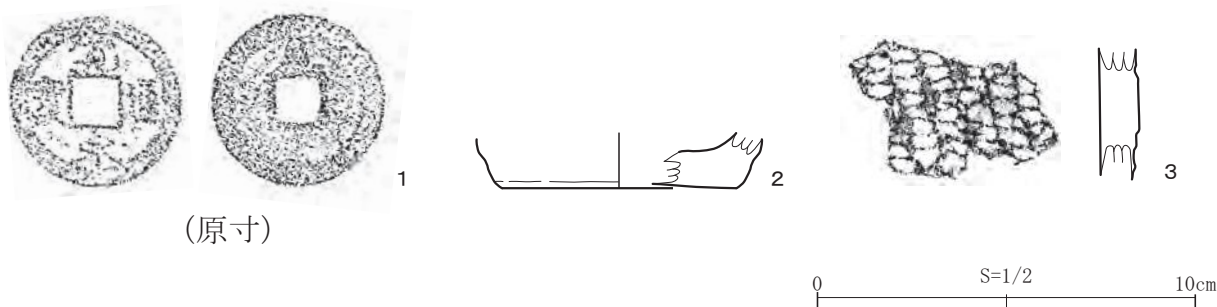
SK14土坑

B区6Tにおいて、SX08土壇状遺構の南側斜面で発見した土坑である。SH11によって大きく削平を受けているが、検出面はII層上面であり、SX08の盛土で覆われている状況を確認した。検出面の高さは、北側ではSX08の上部まで及んでいるのに対し、南側ではそれより約50cm低いSH10の上面となっている（註5）。規模は、東西約2.6m、南北1.5m以上である。南壁際に設定した小トレンチで見ると、深さは57cm、壁面は緩やかに立ち上がっている。埋土は上層が灰白色の砂質土、下層が黒褐色土である。

遺物は出土していない。

出土遺物

1は寛永通宝である。寸法及び書体が元文期とされる江戸深川十万坪銭に類似している。背面は無紋である。元文期間は1736年から1741年までであり、その頃の鑄造と考えられる。2は縄文土器の底部破片資料である。体部下端に細かい縄文がわずかに残っている。3は縄文土器の体部破片資料である。



(原寸)

番号	種類	出土地区	特徴		口径 残存率	底径 残存率	登録番号
		層位	外面	内面			
1	銭貨「寛永通宝」	SX05 11層	元文期（1736～1741）の江戸深川十万坪銭に類似。 背面は無文。				R1 （金属）
2	縄文土器	A1T SX08盛土	体部下端に細かい縄文			(6.2) 10/24	R1
3	縄文土器	B5T IV層	縄文				R7

図16 出土遺物

(千葉・菅原わかな)

註5 SK14周辺は西側から伸びる丘陵尾根の先端部にあたり、SK14はその上面から掘り込まれ、埋められた後にSH10の造成によって削平された可能性がある。

③発見した遺構の年代と性格

a. S X05整地層

S X05については令和4年・5年度に調査を実施している。令和5年の調査報告書ではR 5 - 1区からR 5 - 6区の堆積層をI層 (I a~ I d)、II層 (II a・ II b)、III層に整理し、I b層を造成土①、I d層を造成土②とし、年代は造成土①が江戸時代以降、造成土②が江戸時代として、「江戸時代以降の時期に大がかりな造成工事が複数回に渡って行われ、境内の整備がおこなわれたことが明らかになった」と結論付けた(一関市教育委員会2024)。しかし、複数の土層の内、I b層とI d層のみを造成土と見た理由やそれらの平面的な広がりが明示されていないこと、また造成層及びその下層の年代についても疑問があったことから、今年度は令和5年度調査区の一部の再調査を行い、令和4年度の調査区も含めた平面的な調査を行った結果、前項では3 a・ 3 b層を舗装、4 b層以下を基礎整地とする1時期の整地層として記載した。S X05は駒形根神社境内の変遷を考える上では重要な遺構であることから、令和4・5年度の調査内容を検討しながら問題点を整理してみたい。

各層の堆積状況：令和5年度調査のI a層(表土)を除くI b層以下の平面的な分布状況をみると、最上層のI b層はR 5 - 1区からR 5 - 4区まで境内側のほぼ全域に広がっているが、I c・ I d層は境内側から離れて、下層のIII層は境内側近くのみ堆積しており、土層ごとに偏りが見られる(図18)。また、I c層からIII層は境内側から裾部にかけて斜めに堆積しており、最上層のI b層上面のみほぼ水平となっている。令和5年度の報告では、造成土①であるI b層と造成土②であるI d層の間に「ある程度の時間差」を想定しているが、それを示すような自然堆積層は確認できなかった。丘陵斜面におけるこのような土層の偏りや斜めの堆積は自然堆積とは考えにくく、造成土とされたI b層とI d層以外の各層も人為的な堆積層と見るべきであろう。R 5 - 2・ R 5 - 3・ R 5 - 4区北壁の断面図でみると、I c層の上面は東側から西側に傾斜しており、西端部でI b層を厚くすることで上面の高さを調整し、平坦面を構築したとみられる(図17下)。このような状況から、S X05は1時期の整地層と考えるのが妥当である。

また、各層には大小の礫が多く含まれているが、このことは盛土の原材料確保のため、黒褐色土の

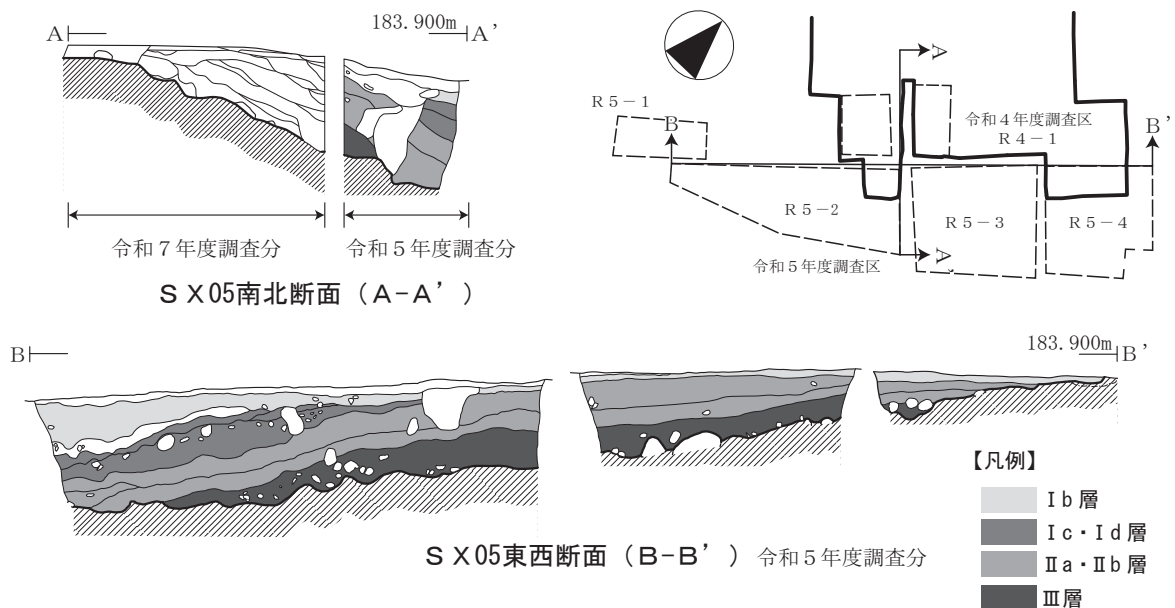
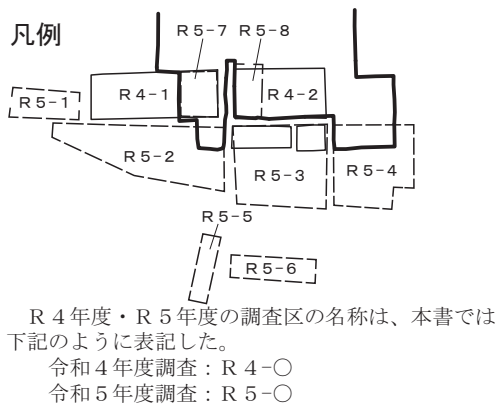


図17は今年度調査及び令和5年度調査による土層断面図を合成し、一部加工して作成したものである。令和5年度調査の土層の表示は報告書の記載に従った。

図17 S X05土層堆積状況



みならず礫を包含する地山の掘削も行われていたことを示唆するものであり、その可能性は考慮する必要がある。

遺構の年代：S X05を1時期の整地層と理解すれば、I b層からⅢ層までの出土遺物を層位的に捉える必要はなくなる。S X05から出土している遺物の中で、遺構の年代に関わるものとしては、令和5年度の調査で出土した青磁小杯(図19-1)、染付磁器碗(2、3)、色絵磁器湯呑(4)などがある。1は体部を飛鉋で仕上げた小杯で、薄い緑色を呈するいわゆるクロム青磁である。2は型紙を使用し、摺絵という手法で絵付けした丸碗で、外面には飛び雀、内面口縁部には瓔珞様の文様が配されている。顔料は酸化コバルトを使用して鮮やかな群青色に発色している。3は体部下半に連続する菊弁の輪郭を二重線で描き、その間を同色の薄い顔料で塗りつぶした手描きの小杯である。S X05から出土した青磁小杯や摺絵丸碗と類似したものは、東京都の菅谷遺跡において、明治33年(1900)を下限とする大規模な土坑から多量に出土した事例(都立学校遺跡調査会2000)や、沼津市の瀬戸物屋跡で大正2年(1913)の火災による焼土層から出土した事例(沼津市歴史民俗資料館2000・瀬戸市歴史民俗資料館2002)などがある。しかし、そのような製品の生産がどの時期まで続くのかは明らかではないようで、美濃窯の酒井ヶ峰1・2号窯跡(多治見市)から出土した青磁小杯の年代は「19C後期～20C前期」と記載されている(瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2007)。美濃窯では明治15年(1882)頃廃窯とされる大原窯以降に型紙を使用した摺絵の染付が現れるという研究があり(多治見市教育委員会1993)、青磁小杯については明治20年代から昭和15年頃までは一般的な技法という指摘もある(註6)。地元では拝殿が昭和30

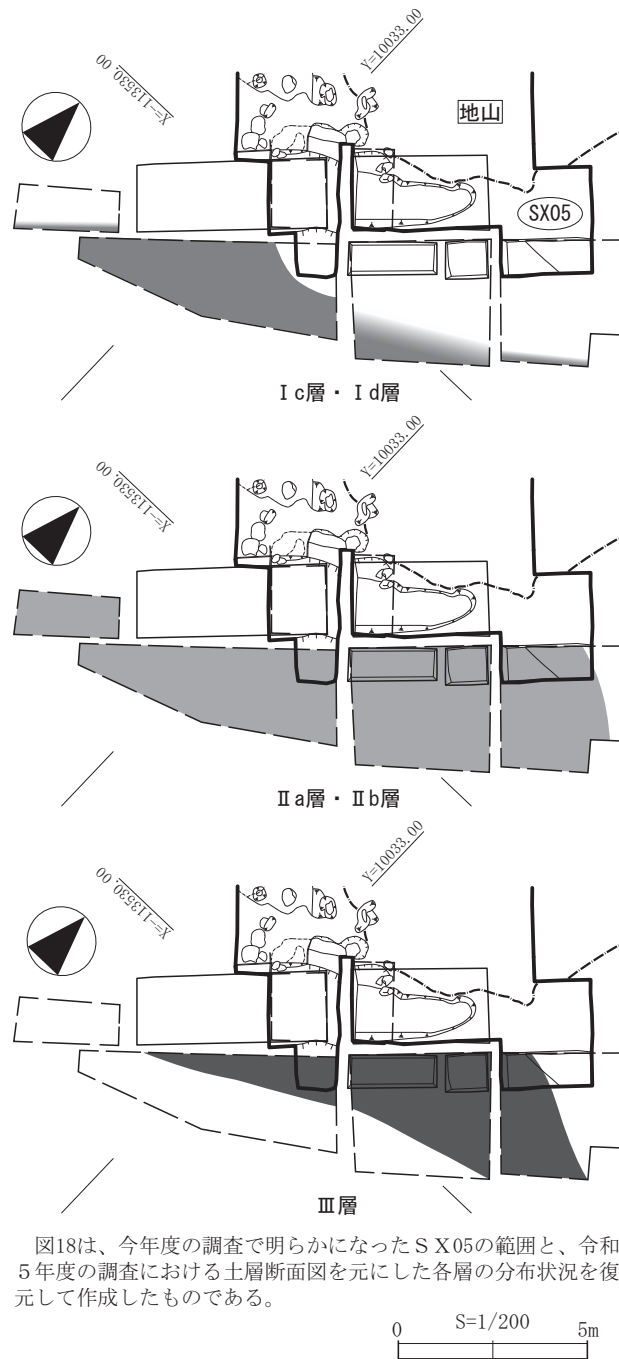
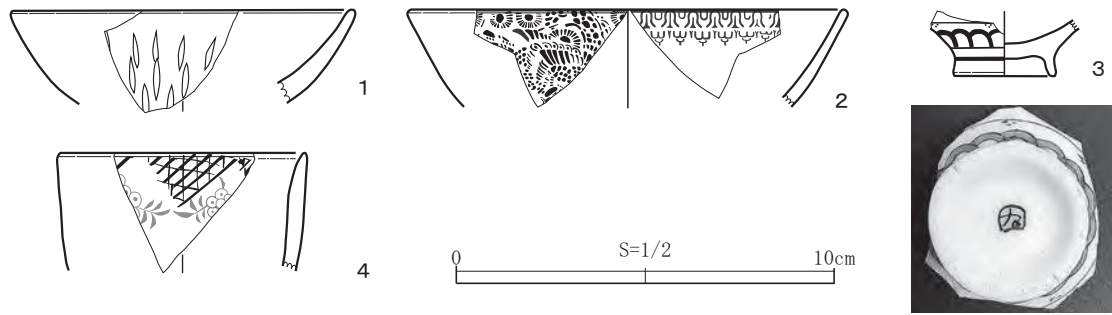


図18は、今年度の調査で明らかになったS X05の範囲と、令和5年度の調査における土層断面図を元にした各層の分布状況を復元して作成したものである。

図18 令和5年度調査におけるSX05土層の平面分布模式図

(註6) 瀬戸市埋蔵文化財センター 金子健一氏、山下峰司氏の教示による。



番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	令和5年度調査報告書掲載番号
		外面	内面			
1	青磁・小杯	飛鈿		(9.2) 2/24		写真図版5 駒形根神社 出土遺物(7) 7a・7b
2	染付・丸碗	型紙摺絵	型紙摺絵(環珞文)	(5.8) 1/24		写真図版5 駒形根神社 出土遺物(7) 13a・13b
3	染付・小杯	体部下半に手描き菊文→濃み。 底部に落款			(2.6) 24/24	写真図版5 駒形根神社 出土遺物(7) 12a・12b
4	色絵磁器・湯呑	手描き色絵。南天→赤絵	口縁内面端部袖掻き 取り	(6.6) 1.5/24		

図19 S X05出土遺物(令和5年度調査分)

年(1955)頃にはあったという聞き取りがあり、これは青磁小杯の年代と大きく乖離するものではないことから、S X05造成の時期については、明治15年以降、昭和30年以前というおおよそ70年の中に考えておきたい。

遺構の性格：S X05は拝殿と神楽殿の間にある広場の南西部に施工された整地層である。令和5年度の調査では、盛土層(基礎整地)がR5-5区とR5-6区でも検出され、施工前の丘陵端部から約12mまで及んでいることが確認できる。しかし、整地層(舗装)自体は約8mまで確認できるものの、平坦面は約5mとなっている。この平坦面は神楽殿の正面まで続いており、東側は狭い通路状の平場を介して傾斜面になっている。この状況から、S X05は、拝殿-神楽殿間の広場を対象にした拡張整備事業であり、S X08造成前に丘陵部を掘削して造成したS H10とは連動して施工された可能性が高いと考えられる。

b. S X06整地層

各層の堆積状況：S X06は拝殿北西部から北側にかけて分布している。拝殿やS X08の調査で部分的に検出したに過ぎないが、厚い黒褐色土と、その上に直接堆積している地山土主体の褐色土はS X05における基礎整地と舗装のあり方と同様の堆積状況と見られる。

遺構の性格：基礎整地と見られる黒褐色土が拝殿の北西隅から北東方向に傾斜する地山上に直接盛土され、その上面に地山土を主体とした整地層を施工している状況は、拝殿建設に伴うS X03とも共通し、境内の拡張工事と見られる。この土層の広がりには明確ではないものの、本殿の前面(幣殿跡)まで伸びている状況から、本殿建設に伴う整地層と考えられる。

遺構の年代：本殿は、昭和46年(1971)の上棟を記した棟札や同年の寄進額が現存することから創建年代が明らかである。S X06整地層はそれに先行する地盤造成に関わるものであり、年代は昭和46年以前となるが、造成範囲が平坦面で東西約10m、南北約4m程度の規模であることから、昭和46年かそれをわずかにさかのぼる年代と考えておきたい。

c. S X08土壇

遺構の性格：B6Tの東側が盛土造成、西側が地山削り出しと構築方法が異なるが、西側も背面には盛土層が確認できることから、土壇の構築を意図していることは明らかである。境内の北辺を画する位置にあるが、ほかの3辺には目立った施設がないことから、区画施設として構築された可能性は

低いと考えられる。S X08の上面には現在17基の供養塔や石祠が立ち並んでいるが、直線的な配列や、その設置面が土壇の盛土層上面となっていることから供養塔等設置のために構築された可能性が高い。その方向は、本殿や本殿建設に先行する拝殿の中軸線と直交することから、境内の整備にあたり、その主要な施設として計画的に配置されたと考えられる。

遺構の年代：S X06整地層がS X08の盛土の一部となっていることから、両者は同時期に造成されたと考えられ、年代は昭和46年かそれをわずかにさかのぼる頃と考えられる。

d. S H10広場

遺構の性格と年代：令和6年度の調査において、拝殿は、現在の境内の北東部にあたる丘陵端部を拡張整備して現在地に設置した状況を確認している。建造物自体は他所から移設したと考えられており、神楽殿と約15mの間隔を置いて現在地に移設された状況から、S H10は拝殿と神楽殿の間に設けられた広場と考えられる。年代はその南東部の整備に関わるS X05と同じく明治15年以降、昭和30年以前と考えられる。

e. S K12・13土坑

S K12・13はⅡ層より下層で検出したものであり、今回の調査区内では確実に古い時代の遺構であるが、遺物が出土していないことから年代は不明である。このような遺構は令和6年度の調査区でもⅡ層に相当する層の下層でS X04を発見しており、境内周辺に存在した可能性がある。今回の調査では縄文土器の破片が出土しているが、それらの時期の遺構については明らかではない。

以上の遺構のほか、S X07とS K14については来年度も引き続き調査を行う予定であり、詳細はその成果を含めて報告したい。

④まとめ

今回の調査は、令和4・5年度調査区の部分的な再調査を行いながら、境内の造成に関わる遺構の検出作業を行い、S X05・06・07整地層、S X08土壇、S H10広場、S H11平場、S K12・13・14土坑の調査を行った。その概略は以下のとおりである。

- a. S H10は境内の拝殿・神楽殿間に造成された広場であり、S X05はその南端部を拡張整備した明治15年以降、昭和30年以前の整地層と考えられる。
- b. S X06整地層は昭和46年の本殿創建に関わる整地層であり、同時期に供養塔や石祠を設置したS X08土壇が構築された。
- c. S X05整地層、S X06整地層、S X08土壇、S H10広場などは現在の駒形根神社境内の景観を形作った近代の整備と位置付けることができる。
- d. 今回の調査で中世の遺構・遺物は発見できなかった。

(千葉)

6 総括

令和7年度は、白山社及び駒形根神社の調査を実施した。具体的には駒形根神社の境内で、拝殿と神楽殿の間の広場を面的に調査した。また、平場の西側にある土壇周辺にトレンチを設定して調査した。その結果、拝殿と神楽殿の間の広場の南東部は、明治15年から昭和30年以前の間には整地されたこと、本殿が昭和46年の建立であることから、その周辺や土壇の整地が同じ頃に行われたことを明らかにできた。

今回の調査成果により、現在の駒形根神社境内地は、近代に形作られた景観であるといえる。今後は、境内地が整備される以前の地形や整地の時期を整理する作業が求められる。

今回の調査成果を受けて、骨寺村荘園遺跡の研究がさらに進むことが期待される。

(菅原孝明)

【参考文献】

- 一関市1977『一関市史 第1巻通史』
- 一関市教育委員会2007『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第2集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書(第8集)』
- 一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2023『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2024『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市博物館2011『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
- 一関市博物館2015『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
- 一関市博物館2016『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会
- 入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか—骨寺村絵図研究の過去・現在・未来(1)—」『一関市博物館研究報告』第19号
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号
- 小川吉儀1966『新寛永錢鑑識と手引』
- 奥平昌洪1938『東亞錢志』14
- 菅野成寛2020「平泉藤原氏と仏教」『平泉野仏教史』吉川弘文館
- 黒田日出男1995「陸奥國中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社
- 佐藤弘夫2006「霊場—その成立と変貌」東北中世考古学会編『中世の聖地・霊場』高志書院
- 佐藤弘夫2010「霊場と巡礼」『兵たちの極楽浄土』高志書院
- 島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班
- 関根達人2009「北奥の一世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会
- 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2007『窯跡出土の“近代陶磁”—瀬戸・美濃窯の近代1—』
- 瀬戸市歴史民俗資料館2002『大正二年のせともの屋』
- 多治見市教育委員会1993『美濃窯の焼物』多治見の古窯第3号
- 都立学校遺跡調査会2000『菅谷遺跡 東京都荒川区千住製絨所跡都立荒川工業高校地点』

奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』

沼津市歴史民俗資料館2000「考古資料（3）大正2年の火災で焼失したセトモノ屋の店先」『沼津市歴史民俗資料館資料集17』

平泉町教育委員会1995『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第51集

松本博明2011『一関市巖美町本寺の民俗—骨寺村荘園遺跡のくらし—』一関市教育委員会

土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館

平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房

吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森

【附章】

骨寺村荘園遺跡出土遺物保存処理業務委託報告書

(公財)元興寺文化財研究所
埋蔵文化財保存研究グループ

1. 対象資料

磬など 8点 (別紙一覧表参照)。

2. 保存処理内容

下記のような工程および内容に従い保存処理を実施した。昨年度は処理前調査からクリーニングまでが完了しており、今年度は、防錆・強化処理から処理後調査を行った。

【養生・洗浄】

遺物を状態に合わせてポリエチレン製ネット (ダイオスクリーン/ダイオ化成株式会社) で養生し、有機溶剤 (エタノール・酢酸エチル・ナフサの混合液) の中に浸漬、もしくはエタノールの中に浸漬して、表面に付着する油脂分や土などの不純物を除去した。

【脱塩処理】

No. 1, 2, 3, 5, 8 は鉄のため昨年度の処理方針検討時に脱塩処理を行わないこととなった。それ以外の No. 4, 6, 7 は、アルカリ性の0.5%セスキカーボネイト水溶液の中に浸漬し、新たな錆の誘発原因の一つである腐食促進陰イオン (塩化物イオンや硫酸イオンなど) を溶出させた (図1)。定期的に液交換を行い、溶出した陰イオン濃度をイオンクロマトグラフィーにより確認し、濃度が基準値以下で安定するまで液交換を続けた (別紙脱塩データ参照)。脱塩終了後、アルカリ分を除去した。



図1 脱塩処理

【樹脂含浸】

遺物の強化と防錆のため、フッ素系アクリル樹脂 (アクアトップFクリヤー/大同塗料株式会社) 20% ナフサ溶液による減圧含浸を、脱塩処理を行った遺物は1回、その他の遺物については乾燥を挟んで3回実施した。



図2 第2次クリーニング

【第2次クリーニング】

脱塩処理を行った遺物は、第1次クリーニングで除去しきれなかった錆などを除去した (図2)。

【樹脂含浸】

脱塩処理を行った遺物は、状態に合わせてポリエチレン製ネットで養生し、前出のフッ素系アクリル樹脂による減圧含浸を2回実施した。

【樹脂塗布】

全点について、外気との接触を可能な限り少なくし防錆効果を上げるために、含浸時の2倍に薄めた樹脂を、乾燥を挟んで2回遺物に塗布した (図3)。



図3 樹脂塗布

【復元・整形】

接合の必要な箇所は、シアノアクリレート系接着剤やエポキシ樹脂 (セメダインハイスーパー5分・30分硬化タイプ/セメダイン株式会社) を用いて接合した。空隙部分や欠損部は、エポキシ樹脂にガラスマイクロバルーン (スフ

エリセル 34P30/ポッターズ・パロティニー株式会社) を混合したものをを用いて復元した。復元部分は小型グラインダーを用いて周囲と違和感のない程度に整形した(図4)。

【樹脂塗布】

樹脂塗布を1回実施した。

【実測図作成】

接合までを終えた状態の遺物について、実測図作成を行った。

実測図の作成においては、X線画像を参照し、遺物本来のラインを引いた。鱗口や髻などといった鑄造製品については、本来のラインがわかりづらいため、現在の遺物に見えるラインを引いた。

【仕上げ】

樹脂含浸や樹脂塗布によるつやを、つや消し剤(NEW ワイドスプレー つやなしクリヤー/ニッペホームプロダクツ株式会社)を用いて抑えた。復元部はアクリル絵具(アクリリックカラー/ホルベイン工業株式会社)を用いて周囲と違和感のない程度に補彩した。ただし、No.1の復元した鈕(図5 矢印)と、No.2-2で元々ない部分を大きく復元した部分(図6 矢印)については、復元であることが分かるよう遺物と同系色を単色で補彩した。

【処理後調査】

保存処理終了後、考古学的・科学的見地から遺物の状態をチェックした後、写真撮影を行い、経過観察をした。



図4 復元・整形



図5 No.1 補彩前



図6 2-2 補彩前

* 今回使用した下記の樹脂や接着剤は、溶剤(アセトン、酢酸エチル等)で溶解、膨潤、あるいは軟化させ除去することができる。

- ・シリアノアクリレート系瞬間接着剤(セメダイン 3000R S/セメダイン株式会社)
- ・アクリル樹脂(パラロイドB72 /ダウ・ケミカル日本株式会社)
- ・フッ素系アクリル樹脂(アクアトップFクリヤー/大同塗料株式会社)
- ・エポキシ系接着剤(セメダインハイスーパー5分・30分硬化型/セメダイン株式会社)
- ・アクリル絵具(アクリリックカラー/ホルベイン工業株式会社)

骨寺村荘園遺跡出土遺物保存処理業務委託

	遺物名	一関市ラベル等	メタルチェック	処理内容等
1	磬	骨寺村荘園遺跡	L反応	鑄鉄。表面中央に「大」の陽鑄。一部が錆の進行により崩壊。可能な範囲で破片を接合した。欠損していた右側の鈕を復元した。 処理内容は報告書の通り。
2-1	不明①	骨寺村荘園遺跡 F2	特L反応	鑄鉄。鱗口片か。処理内容は報告書の通り。
2-2	不明①	骨寺村荘園遺跡 F3	特L反応	鑄鉄。2-3、2-4と接合。鱗口と考えられる。大きく欠損している部分を復元した。 処理内容は報告書の通り。
2-3	不明①	骨寺村荘園遺跡 F1	特L反応	鑄鉄。2-2へ接合。 処理内容は報告書の通り。
2-4	不明①	骨寺村荘園遺跡 F4	特L反応	鑄鉄。2-2へ接合。 処理内容は報告書の通り。
3-1	不明②	骨寺村荘園遺跡 F6	特L反応	鑄鉄。処理内容は報告書の通り。
3-2	不明②	骨寺村荘園遺跡 F5	M反応	鑄鉄。処理内容は報告書の通り。
4-1	釘か	骨寺村荘園遺跡 F8	特L反応	先端欠損。処理内容は報告書の通り。
4-2	釘か	骨寺村荘園遺跡 F7	L反応	釘。ほぼ完形か。処理内容は報告書の通り。
5	経筒蓋	駒形根神社 F1	M反応	鑄鉄。処理内容は報告書の通り。
6-1	釘か	駒形根神社 F6	L反応	表面の一部に有機質遺存。処理内容は報告書の通り。
6-2	釘か	駒形根神社 F5	L反応	処理内容は報告書の通り。
6-3	釘か	駒形根神社 F4	反応なし	表面の一部に有機質遺存か。 処理内容は報告書の通り。
7	馬具(引手か)	駒形根神社 F7	L反応	表面の一部に有機質遺存か。引手の一部と考えられる。 処理内容は報告書の通り。
8-1	不明③	駒形根神社 F2	特L反応	鑄鉄。処理内容は報告書の通り。
8-2	不明③	駒形根神社 F3	反応なし	鑄鉄。可能な範囲で破片を本体へ戻した。 処理内容は報告書の通り。

(*) メタルチェックによる反応とメタルの残存について

メタルチェック 反応なし → H反応 → M反応 → L反応 → 特L反応

メタル残存 不良 → 極めて良好

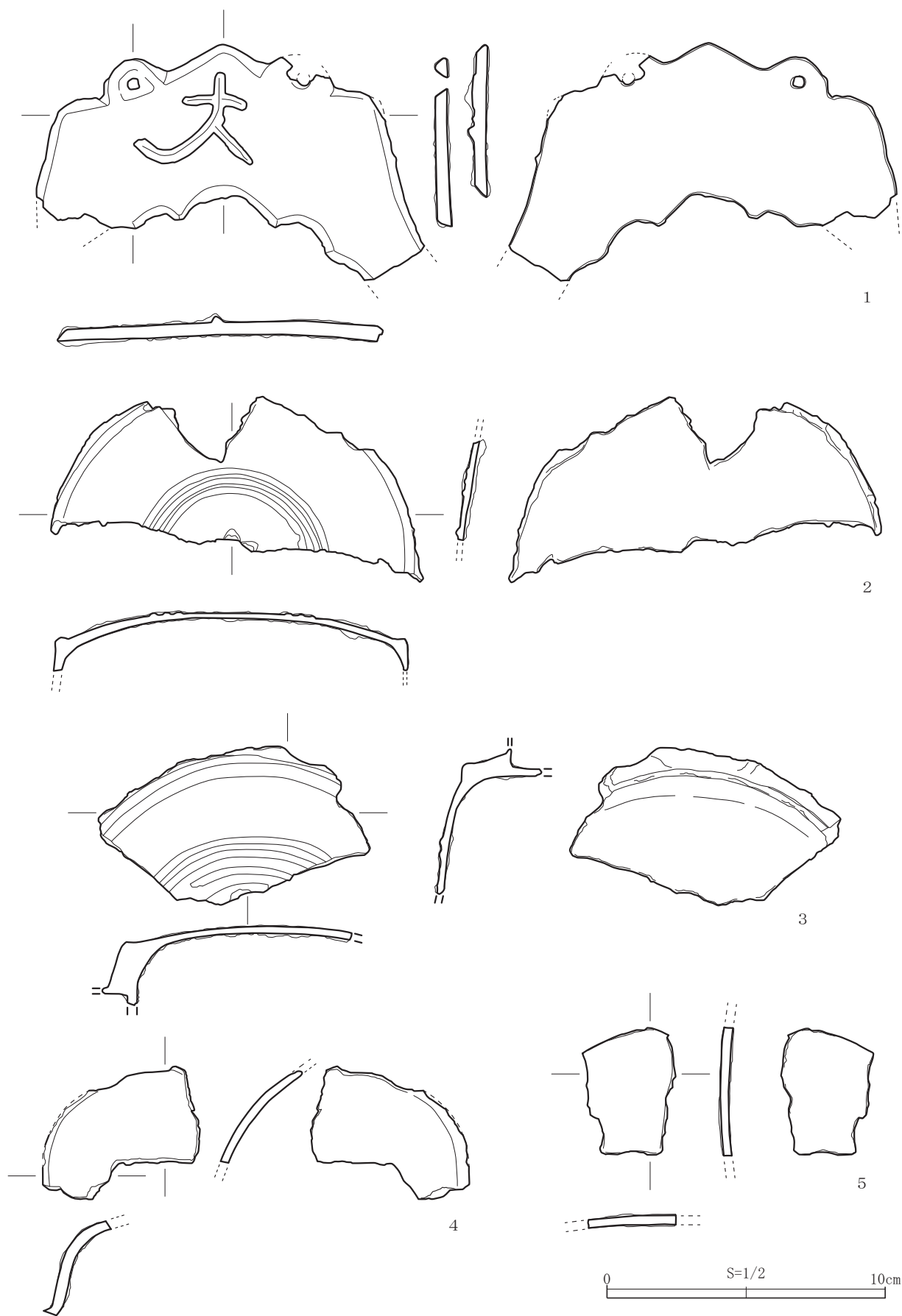
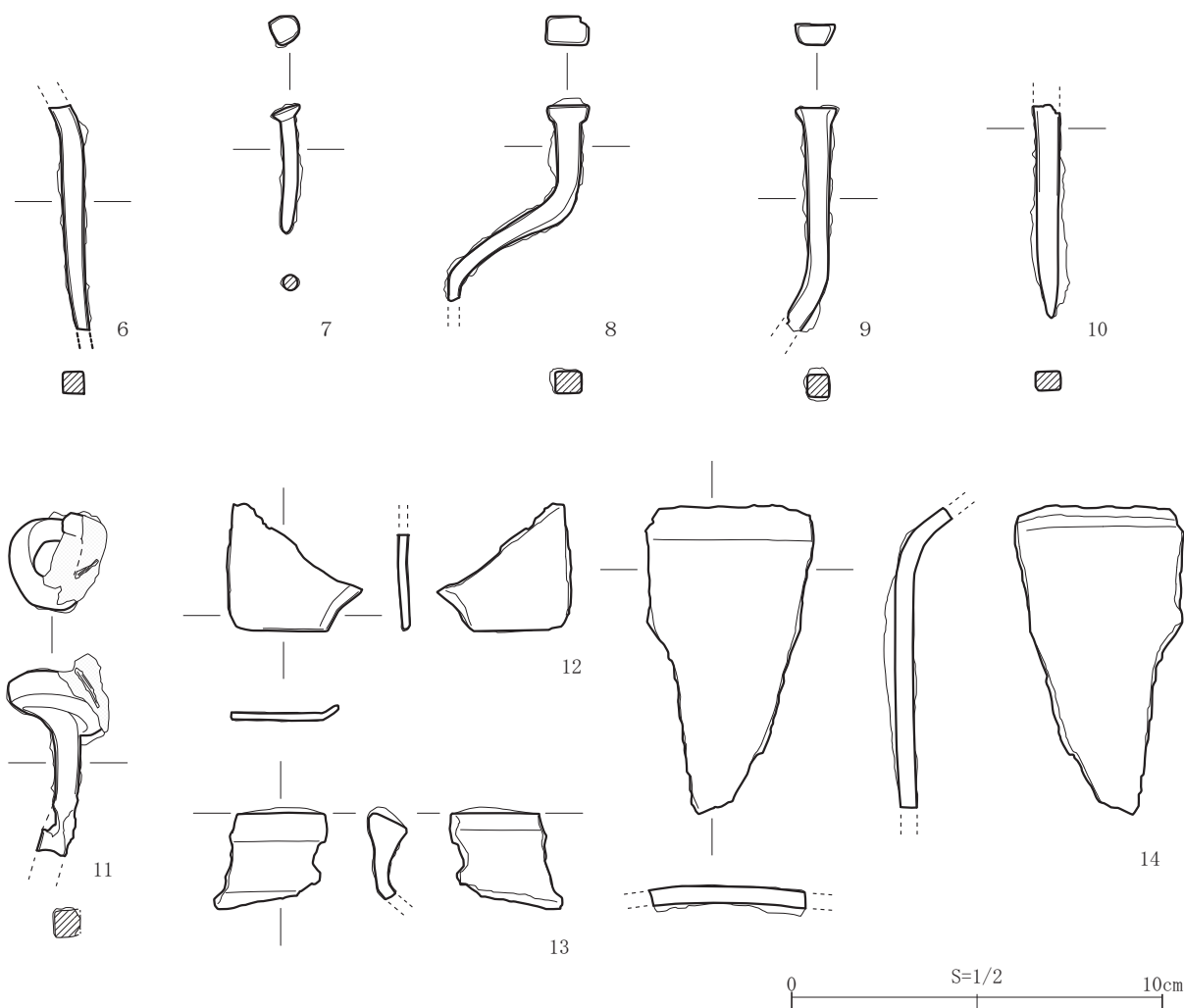


図1 令和5年度出土鉄製品（1）



番号	名称	特徴	委託番号	番号	名称	特徴	委託番号
1	髻	表面中央に「大」字陽鑄	1	8	鉄釘		6-1
2	鰐口	撞座に花卉状の陽鑄	2-2	9	鉄釘		6-2
3	鰐口		2-1	10	鉄釘		6-3
4	不明鑄造製品		3-1	11	引手カ	一部に有機物遺存	7
5	不明鑄造製品		8-1	12	不明鑄造製品		3-2
6	鉄釘		4-1	13	不明鑄造製品		8-2
7	鉄釘		4-2	14	不明鑄造製品		5

図2 令和5年度出土鉄製品（2）

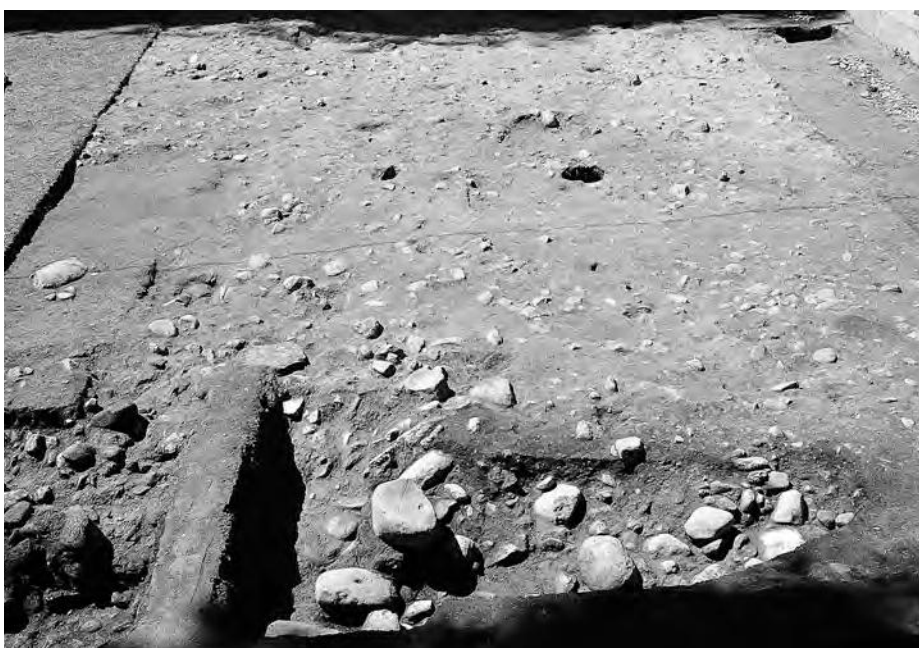
付記

令和5年度の発掘調査において出土した鉄製品14点については、令和5・6年度に公益財団法人元興寺文化財研究所へ保存処理業務を委託した。令和5年度は金属製品8点のクリーニングを主に実施し、令和6年度はそれらと残り6点を合わせて樹脂含侵などの保存処理を実施して、令和7年3月に業務が完了した。本章は、同研究所より提出された「骨寺村荘園遺跡出土遺物保存処理業務委託報告書」の内、保存処理内容や処理経過はほぼ原文のまま、同研究所が作成した遺物実測図については文化財課で浄書し、編集したものである。

1 A区全景 北東より



2 SH10広場・SX05整地層
南東より



3 同上 北より





1 SX05整地層と地山の礫層
北西より



2 SX05整地層 北東より



3 同上 南より



1 SX08土壇 東より



2 SX08土壇盛土とⅡ層
南より



3 拜殿西妻下における旧表土
検出状況 南より



1 SX06整地層と地山の傾斜
南西より



2 拝殿下層の整地層 北より



3 SX09柱穴状遺構 西より

1 S X08土壇とB区トレンチ
配置状況 南西より



2 同上 東より



3 S X08土壇構築状況
南東より





1 S X08土壇盛土と石塔
南より



2 S X08土壇地山露出状況
北東より



3 S X08土壇盛土
北西より

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	白山社及び駒形根神社							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第46集							
編著者名	菅原孝明・千葉孝弥・菅原わかな							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29 TEL0191-82-2242							
発行年月日	2026年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきしげんびちようあざ 一関市巖美町字 こまがた 駒形8-1	03209	NE72- 2283	38° 58' 35"	140° 56' 55"	20250421 ～ 20250930	142㎡	確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
骨寺村荘園	荘園	縄文、中世、近 世、近代	整地層、土壇、広場、 柱穴状遺構土坑	陶磁器（近代）、銭貨 （寛永通宝）、土師器、 縄文土器、剥片				
要約	境内南東部は明治15年以降、昭和30年以前の時期に拡張され、拝殿－神楽殿間の広場もその時期の整備と推定した。本殿は昭和46年の棟札によって創建年代が明らかになり、供養塔が立ち並ぶ土壇は同時期の造成であることを確認した。現在の境内を構成する主要な施設が近代に整備されたことが明らかになってきた。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社

発行 令和8月3月23日

発行・編集 一関市教育委員会

〒029-3105

岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29

電話 0191-82-2242

印刷 川嶋印刷株式会社

〒029-4194

岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

電話 0191-46-4161(代)